

マーラーの歌曲

《リュッケルトの詩による 5 つの歌曲》

指揮者バーンスタインは、グスタフ・マーラー (1860-1911) のことを「左足を 19 世紀に、右足を 20 世紀に突っ込んだ巨人」と言ったが、まさしく彼は世紀をまたいで活躍し、世紀転換期のヨーロッパの空気を体現した作曲家であった。また、オーストリアのなかではボヘミア人、ドイツのなかではオーストリア人、そして世界にあってはユダヤ人……と、いつも自分を「さすらい人」と感じ、家庭や育った環境からだろうか、常に“死”に強迫されているようなところがあった。マーラーの楽曲にはそうした死生観が頻繁に現れ、そこから生まれる独自の楽想に彩られている。そんなマーラーにとって「歌」は一つの音楽的源泉であり、彼の創作を代表する交響曲ですら、歌の集合体であったと言えるかもしれない。

最初に歌われる《リュッケルトの詩による 5 つの歌曲》は 1901~02 年に作曲。詩人リュッケルトは名高い東洋研究者でもあり、東洋的要素をふんだんに含んだテキストがマーラー独特の死生観と融合した。それは 5 音音階で形成される旋律など、本作を貫く作曲技法にも反映されている。この方向性はのちに、畢生の大作《大地の歌》に結実する。

《亡き子をしのぶ歌》

《亡き子をしのぶ歌》もリュッケルトの詩によるもので、1901~04 年に作曲。もともとは声楽と管弦楽による連作歌曲であるが、本日はピアノ伴奏版で演奏される。マーラーは 1902 年にアルマと結婚し、立て続けに女の子が生まれたが、同時期、夫が「亡き子をしのぶ」歌を書いていることにアルマは立腹したという (3 年後、本当に長女が亡くなってしまった)。本作においてもマーラーの死に対する強迫観念がうかがわれ、5 つの歌はどれも哀切で、亡くなった子への追憶や苦悩、なぐさめに満ちており、各曲の繊細な色合いは、この作曲家独自のものである。

原光

「原光」は、若きマーラーが書いた、メルヘンとアイロニーが混在する歌曲集《子供の不思議な角笛》のなかの 1 曲で、交響曲第 2 番《復活》の第 4 楽章にもそのまま用いられた。苦痛のなか、神がもたらす小さな光を希求し、天国に憧れる詩情がひそやかに、そして神秘的に歌われる。